に歸りきぬ、抑寶永四年の大變は、今を距こと百四十八年になりぬれば、又かゝる年數には必變事の出こんなどいふ人もありぬめど、世變はいつあらん事豫めしりがたし、されど常に兎あらん時は、角と用心せば、今其變にあひても狼狽せざるべし、寶永の變を昔ばなしの如くおもひて、既に油斷の大敵にあひぬ、さるによりて後世の人々、今の變事を又昔咄の如く思ひて、油斷の患なからしめんがため、ことのよしをほゞゑりて、此社と共に動きなく、萬歳の後に傳へんと、ふるひおこしたるは、里人が誠心のめでたき限りにぞありける、千規たま〳〵高見の官舍に祗役して、倶に彼の變事に逢たれば、其よし書てよと、人々の乞ふにまかせて、かくは記し侍ぬ、穴賢、

德永千規　誌
前田有稔　書
澤村虎次　刻

安政五年戊午季秋穀旦

次に

施主二十三人の名を印、建之とは大字に彫りあり、こは元治元甲子九月十七日、山崎春成が寫し來れるをもて、こゝに記しぬ、この外國中地震のことにつきて、石ぶみを立たるは、

高岡郡　須崎の東の入口
同郡　宇佐坂の麓
吾川郡　浦戸
長岡郡　里改田金毘羅の社地の石の王垣